

箱で運んだ会議ドキュメント

早稲田大学 渡辺 裕

私が議事進行を努める会議(JTC 1/SC 29)¹⁾では、プレナリー会合中の文書はすべてサーバーの中に蓄積されており、会議中に誰でもアクセスできる状態になっています。会議に必要な文書はすべて事前にWEBを通じてダウンロードできるので、紙による文書配布といったことがありません。しかし、10年ほど前には、参加人数200名を越えるWG 11(MPEG)では、会議文書をコピーして持ち込んでいました。その当時のことを振り返ってみたいと思います。

文書を奪い合う！

SC 29はWG 1(JPEG)やWG 11(MPEG)といったWorking Groupとは異なり、Administrativeな会議です。そのため、参加者は30名程度であり、サーバーもそれほど大規模にならず、簡単に構築できます。しかし、WG 1やWG 11は、100名から300名程度の参加人数になります。この規模では、紙による文書配布はほぼ非現実的となります。例えば、標準化活動がアクティブな企業では、提案文書は1会議中に5件程度になるとしましょう。それぞれに実験データをつけて8枚程度にまとめたとします。1人用のセットで40枚、それが300人分となると12000枚といった分量になります。これはダンボール2箱になるので、国際会議の場へスーツケースに詰めておくことはできなくなります。そこで事前にダンボール2箱をホテル宛に送るはめになります。当時、MPEGの会合では、主力企業はみな提案文書をこのようにして郵送していました。そこでは、しばしば、郵便事情が悪く、箱が届かずに口頭説明だけで提案を済ますといったことも起こりました。

また、各個人への文書配布も非常にやっかいなものとなります。300人分の文書をどこかに置いておいたとして、一人1部ずつ綺麗に取っていってくれるでしょうか？もし200人分しかないとわかったときの人の行動は？答えは簡単です。文書の奪い合いが起こります。ITU-Tのように各国の参加者が事前に把握でき、ビジョンボックスが備えられている場合には、混乱は避けられます。しかし、参加者が会合ごとに特定できないWG会合では、1人で2部や3部のドキュメントを取っ

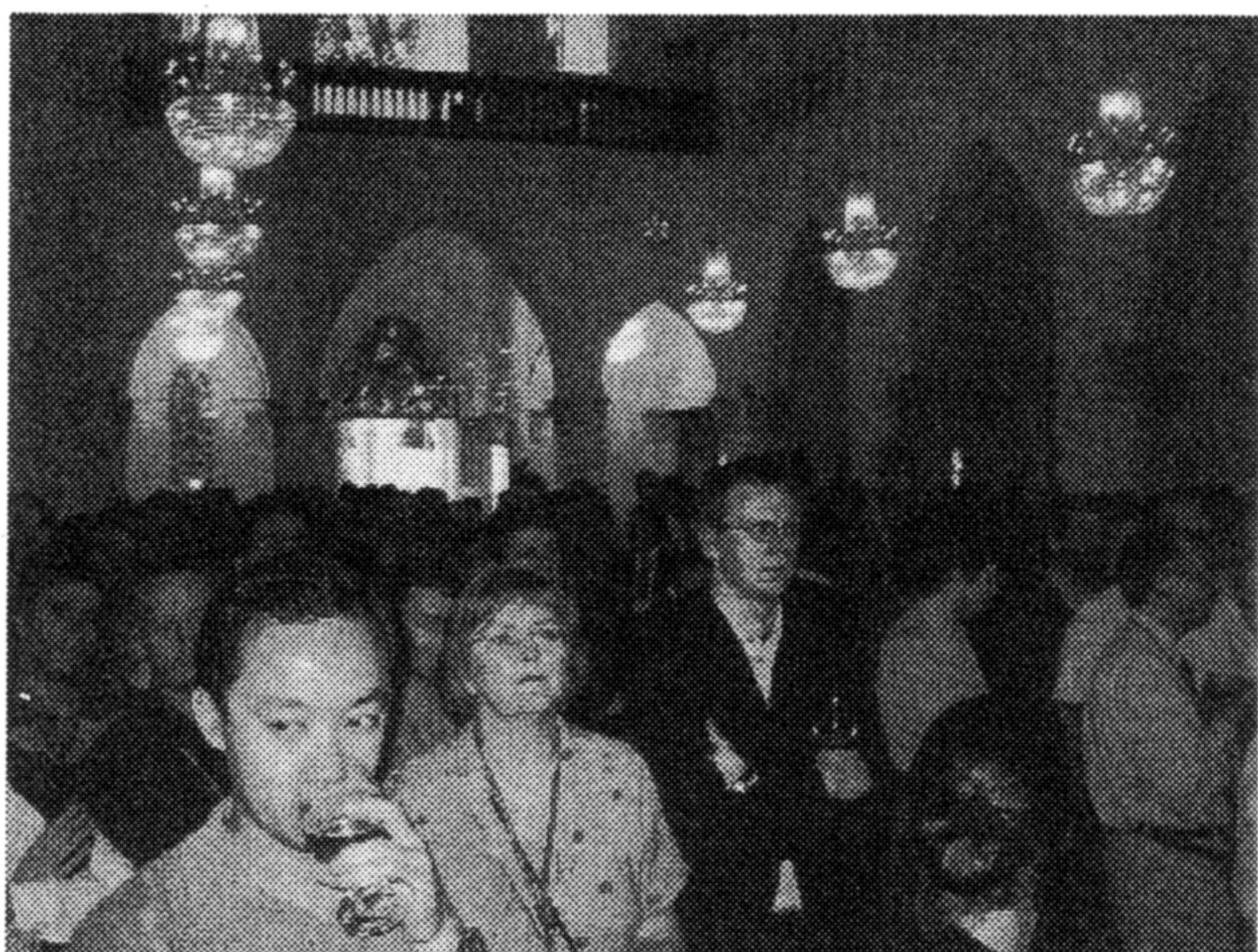
ていくような人も現れます。コピー機をフル回転させて、現地でコピーを作成すればよいのですが、その金額も膨大になり、ホストへの負担となります。コピー機が焼ききれたことも1回や2回ではありません。リオデジャネイロの郊外でコピー機が壊れたときには、どうなることかと思いました。また、提案文書を持ち込める期日も明確にできなかったように記憶しています。事前にConvenor(WG議長)に申告して番号をもらうのですが、直前にかけこむ企業もあったように思います。

良くも悪くも Windows

現在では、良くも悪くも文書はMicrosoft Wordあるいはpdfに統一され、サーバーにアップロードすることが可能になりました。これにはWG 11の文書管理サーバーを長年メンテナンスしてきてくれたIBMのPeter Schirling氏の努力の賜物です。彼によって、文書のアップロード期日が徹底され、配布機構も安定してきました。しかし、無償の奉仕を続けるわけにはいかず、ついにIBMのサイトからNIST(National Institute of Standards and Technology, USA)へと移行しました²⁾。Web siteはpasswordで管理されていますので、各国の参加代表にならないと閲覧できない機構になっています。anonymous ftpでファイルをダウンロードしようとする、サイト自体がロックされる可能性があるのご注意を。一方WG 1のサイトは誰でも閲覧できる部分とそうでない部分に分かれています³⁾。これらの文書を閲覧する機械といえばPCですが、これはWindowsマシンが99%を占めます。Macintoshを頑固に使うユーザもいますが、Wordファイルの展開に時間がかかることが多く、マイナーです。それでも以前はPowerBookにWordを搭載し、規格草案を編集したこともあります。筆者も9年ほど前のブラジル会合ではMPEG-2の規格をPowerBookで書いていました。よくハングアップしたことを思い出します。

今度はテーブルタップを奪い合う

さて、文書の閲覧をノートPCで行うようになると、どうしても必要なのがテーブルタップです。標準化ビジ



第56回 WG 11 シンガポール会合，パーティ会場にて
(WG 1, 11の参加者は400人ほど，http://community.webshots.com/album/11795353_JytrEEncWNより)

ネスの世界では，早朝から深夜までPCを酷使するので，バッテリーの持続時間では全く話になりません。ですから，必ずAC電源に接続します。AC電源はテーブルタップで延長されて，机の近辺まで来ています。この確保が以外と難しいのです。というのは，ご存知のようにAC電源のタップ形状は国によってまちまちです。そこで，変換プラグをつけることになります。MPEGの参加者はその会合場所の多様性から，ワールドトラベラーです。そのため，電源変換プラグは1個でさまざまな形状に対応できるものを買いがちです。このマルチ変換器の物理的サイズがなかなかばかにならず，テーブルタップの他の口にかかってしまい，排他的振る舞いに出ます。最近ではこれをさけるために，5cm程のエクステンションを持ち込み，他人の隙間に入っていけるように工夫している人もみかけます。

今はイーサネットコネクタ

テーブルタップが十分に行き渡ると，PCでの作業は自分の職場と変わらなくなります。唯一異なるのはネットへのアクセスです。ところで，JPEGやMPEGの会合では，会議室の他に，コンピュータ作業用の部屋が準備されます。このコンピュータ作業ルームには，通常外部と接続可能なLANやプリンタが常備されています。会議中に急に文書を入手する必要が生じた場合や，草案

のエディターなどは，イーサネットが必須になります。そこで，最近ではイーサネットの口の周りに人が群がることになります。JPEGやMPEGの長時間の会議に飽きた人たちも群がってきます。モデムダイヤルアップを無料で提供する一部の米国系ホテルでの会議を除いて，間違いなくイーサネットの口が現在の争奪ポイントになっています。

さて今後は？

今後はどうなるのでしょうか。イーサネットコネクタを増やしても，全員がアクセスするための物理的場所はプレナリー会場しかありません。プレナリー会場にLANを設置しても，部分会合に突入してしまえば，使えなくなります。ひとつの解決策として，無線LANがあります。設備環境を整えば，みんなその環境に対応できるようなカードを持参して恩恵に蒙ろうとするでしょう。従って，後は広帯域の確保だけの問題になります。うーん，本当でしょうか？依然として，パーティ会場でビールや食べ物の奪い合いを続けているかも知れません。すべて300～400人レベルといった参加人数が原因といえれば原因なんですが…。

参考文献

- 1) <http://www.itscj.ipsj.or.jp/sc29/>
- 2) <http://mpeg.nist.gov/>
- 3) <http://www.jpeg.org/>

渡 辺 裕



昭60，北海道大学大学院工学研究科博士課程修了。同年NTT入社。以後NTTヒューマンインタフェース研究所，サイバースペース研究所においてビデオ符号化の研究，映像通信システムの開発及び国際標準化活動，特にJPEG，MPEGの標準化に従事。平11年より，IEO/IEC JTC 1/SC 29 Chairman。平12年9月より，早稲田大学国際情報通信研究センター教授。インタラクティブな高度マルチメディアシステムの構築，オブジェクトベースの映像符号化，アニメーション映像符号化とその伝送方法などに興味を持つ。工学博士。